

藁工倉庫から 土佐文化の発信

特定非営利活動法人 蜷藏 [高知県高知市]
(助成決定時の名称: 蜷藏プロジェクト)

テーマ

**美術、演劇、映画、音楽。
土佐一番の文化の蔵うまれる。**

設立年月 2010年10月 (2011年11月法人化)

メンバー数 約60人 (NPO正会員としては10人)

代表者名 竹村 直也

連絡先

〒780-0074 高知市南金田28

アートゾーン藁工倉庫内

e-mail tacogura@warakoh.com

URL <http://warakoh.com/theater> (web)

<https://www.facebook.com/tacogura> (facebook)

@tacogura (Twitter)

わたしたちについて

美術、音楽、演劇、映画という異なるジャンルで活動する4団体が結束し、地域文化の拠点として「巻藏」をつくりあけます。

活動に至った理由や背景

空襲や戦後まもなく高知県を襲つた南海地震、その後の都市開発で古い建物が悉く潰されてきた高知市。今、この街で時の流れを感じる建築といえばせいぜい高知城くらいのもので、それ以外には城下町の風情もレトロな建築もこの街ではほぼ見かけることができません。

こうした状況に危機感を抱く世代が刊行したのが、街に残る「大切にしたい風景や建築」を淡々とアーカイブし、「この街のよさ」を再定義しようとする書籍「高知遺産 (2005, ART NPO TACO発行)」でした。

今回の私たちの活動は、この本が敷いた一本の線上にあります。活動の舞台となるのは、同書にも掲載された高知では希有な戦後建築である藁工倉庫エリア (全部で13棟からなる土佐漆喰と水切り瓦が印象的な倉庫)。これをリノベーションし、地域の文化センターとしての役割を担う多目的ホール「巻藏」をつくろう。高知遺産で示した「定義」を「実行」へ移そうというわけです。

さて、実はこの趣旨にたってART NPO TACOでは同じ倉庫群の一角で(旧)巻藏を2007年に設置していました(第15回助成金を活用)。しかし、人員不足や設備不備などの課題をクリアできず、通知簿をつけるとすれば正直及第点をやつと付けられる程度。そこで、旧巻藏の顧客でもあった劇団グループ「高知演劇ネットワーク演会」、自主上映映画グループ「高知県映画上映団体

ネットワーク」、音楽イベントをつなげる「terzotempo」にTACOから声かけをし、4団体の知恵とマンパワー、少ない財政を突きあわせて課題解消にあたる任意団体「巻藏プロジェクト」を構成し、具体的な改修方法や資金確保策を2010年夏頃から練り始めるようになつたのです。

これと期を同じくして、藁工倉庫エリア内でアール・ブリュット(障害者や正規の美術教育を受けていない作家作品)を展示収蔵する美術館《藁工ミュージアム》を設置する企画が、障害者雇用に実績のある「NPOワークスみらい高知」から持ち込まれます。

話はここから急転回をし、同法人の投資のもとミュージアム隣接地に巻藏を移転させ、一帯を《アートゾーン藁工倉庫》として再開発する段取りとなりました。本助成申請の段階では、巻藏の設備整備は全て「巻藏プロジェクト」にて行う予定であったのが、巻藏の企画と日常管理を担う形に変更となつたのはこのためです。

実際にできるのだろうか。作ったところでうまく運営できるのだろうか。様々な不安を抱えながらも、「巻藏プロジェクト」は「NPO巻藏」として2011年冬に法人化して各グループの責任者を理事として迎え入れ、演劇・映画・音楽・美術の制作やマネジメント活動に携わる(それなりに)多士済々な面々で「自分たちのハコ」をつくっていくことになつたのです。

○施設計画の検討

椅子ひとつ決めるのも大変な事前協議

東日本大震災のショックも冷めやらぬ2011年春頃から、毎週集まつてはその都度発生する課題をクリアするべく議論を重ねていきました。濃密な協議のなかで最も喧々諤々となつたのが、のことながらどのような設計にするのか、どのような設備が必要なのかということです。たとえば、劇団からすれば照明をつるすバトンがどれくらい設けられるのか、箱馬などの舞台設置のために必要な設備をどう説いて整理するかが第一の要望になります。同じように、映画上映団体であれば画面に照明の影などが入り込まず、なおかつ映写機の搬入もしやすいスペースを確保したいといった要望があります。

これらの要望は往々にして相反するもので、特に一番難しかつたのが実に地味な話ですが「椅子」でした。お客様を迎えて作品を見ていただくということ、それ自体は演劇・映画・音楽とも同じことです。しかし、演劇は舞台全体を見通せるような客席配置ができることが一番重要で、映画は2時間じつとしていなくてはいけないので座り心地を一番重視します。そして、音楽は座り心地よりも雰囲気がどちらかというと大切です。さらに、講演会や会議での利用も考えれば、そこそこ品のある椅子がいいだろうということになります。むろんこれに予算との兼ね合いも出てきます。

全国的にみても、演劇・映画・音楽の利用を満足する、しかもその演者自身や上映団体自身が設備を検討し、その後の運営にもあたつていこうとする事例はそう多くないと思います。私たちは、「全国的にこういったハコがない理由は、これが」と現実をつけつけられたのです。

しかし、街の歴史を刻んできた古い蔵を使った新しい文化拠点を作ろうという熱意は、演劇・映画・音楽・美術などのグループも失いませんでした。「土佐一番の文化の蔵」をつくることが大変なのは当たり前のことで、それぞれの団体が希望する椅子を持ち寄つては実際に座り心地を確かめ、工事中の新しい蛸蔵に持ち込んで空間との調和まで確かめました。……結局、椅子が届いたのは、実際に開館の3日前のことでした。



アートゾーン蔵工倉庫の全景。

左から「蔵工ミュージアム」、「土佐バル」、「蛸蔵」。

開館半年を経て、中庭の環境改善なども課題になっています。

2012年秋には泥のレンガを作ってベンチを設置する予定です。



「蛸蔵プロジェクト」改め「NPO蛸蔵」が生まれたのは、それぞれ分野の異なる4つの団体が知恵とマンパワーを持ち寄ることができれば、多くの衝突があつてもその議論の中でよりよいものが化学反応的に生まれるのではないかという期待があつてのことです。正直、椅子だけで空中分解しそうなくらいに議論も白熱したのですが、この小さくて大きな問題をクリアして後は、様々な設備や備品についても使い方を提案しあつたり、既に各グループで所有している物を持ち寄ることで充実したハコとなるよう集中して準備が進められたように思います。

○新・蛸蔵オープニングイベント

約9ヶ月の議論を経て、2011年12月23日、アール・ブリュットを展示する《藁工ミュージアム》、地中海料理と土佐の食材のコラボレーションを楽しめる《土佐バル》、そして《蛸蔵》からなるアートゾーン藁工倉庫がグランドオープンしました。これを記念して、この日から三日間、蛸蔵でオープニングにふさわしいイベントを数多く開催しました（18日と19日には先行して蛸蔵でプレオープニングライブも開催）。

数時間おきに舞台のセッティングも変わるこのイベントを陰で支えたのは、「高知演劇ネットワーク演奏会」のメンバーでした。舞台制作で鍛え上げられた行動力は彼らしか持っていないものであり、たくさんの劇団メンバーがテキパキと舞台の設営から音響などのセッティングをしてくれました。なんにせよ、得意分野がみごとに違うNPO蛸蔵を構成するそれぞれのグループが、力を合わせて成し遂げることのできた三日間だったのです。

蛸蔵のホール全景。左側にみえる階段状の棧敷席は組立式で、イベント内容によって組み替えたり片付けることができます。70人から100人程度の収容人数で、高知では唯一ともいえるミニホールです。



新蛸蔵のこけら落としを飾った京都の音楽家「mama!milk」。旧蛸蔵時代から毎年演奏していただいています。

12月18日

新蛸蔵オープニング記念演奏会 第一夜—耳を澄ます
mama!milk 冬の演奏会 Dialogue for Nude'

アートゾーン藁工倉庫のこけら落としを飾ったのは、京都の音楽家mama!milkとLITTLE CREATURESの栗原務さん。旧蛸蔵でも毎年恒例になっている京都のアコーディオンとコントラバスのデュオ、mama!milkの演奏会。妖艶で濃密な世界。約80名を動員。

12月19日

新蛸蔵オープニング記念演奏会 第二夜—夜をくぐる
WATER WATER CAMEL & 森ゆに

こちらも旧蛸蔵から、毎年ライブを行っているロックバンド、WATER WATER CAMELとピアノ弾き語りの森ゆにによるライブ。親密な空気とともに心地よくも圧倒的なロックなサウンド。約80名を動員。

12月23日

オープニングセレモニー

尾崎高知県知事やアール・ブリュットの普及に努められている女優・東ちづるさんをはじめ、多数の方にオープニングを祝福いただきました。推定約300名程度を動員。

藁工トークセッション vol.1「リノベーションと街」

古い倉庫をリノベーションして、新しい空間にする。高松の北浜 Alley、徳島の第二倉庫、高知のアートゾーン藁工倉庫の仕掛け人が集い、これら3つの「倉庫」が文化に、観光に、いったいこの先どのように資することができるのか、藁工倉庫の改修設計を担当した建築家竹原義二さんのお話もまじえつつ、課題と連携のありかたを模索しました。約120名を動員。

新蛸蔵オープニング記念演奏会 第三夜—クリスマスの足音
ticomoon

ハープとギターのデュオ、tico moonを迎えたクリスマスの演奏会。蔵の響きとの相性も抜群で、ひと足はやいクリスマスプレゼントに観客もスタッフもうつとりと聞き惚れていきました。約60名を動員。

蔵の空間にハープとギターの音色が響き、心地よい時間を演出してくれた「ticymoon」。



12月24日

東ちづるさん講演会「アウトサイダーアートでつながる -人をハッピーにするアート-」
障がいのある人のアートをこよなく愛する東ちづるさん。幅広いアール・ブリュットへの関心と知識を少しだけ分けていただけた、あつという間の90分でした。約60名を動員。

福岡伸一さん講演会「科学と芸術のあいだ」

画家・フェルメールと顕微鏡の父・レーウェンフックにまつわる大胆な仮説から、動的平衡にまつわる興味深い話題をわかりやすくお伝えいただきました。約120名を動員。

映画「海洋天堂 Ocean Heaven」上映会

感動の名作「海洋天堂」。終劇後、席から離れられない方ちらほらとおられました。約50名を動員。

新蛸蔵オープニング記念演奏会 第四夜—光と影の小さな旅
ランテルナムジカ（トウヤマタケオ + nakaban）

作曲家でありピアノ弾きであるトウヤマタケオと画家nakabanのユニット、ランテルナムジカのライブ。ピアノに合わせて、プロジェクトに次々と紡ぎだされる絵。クリスマスイブにどこかの異国に旅をしてきたかのような不思議な感覚でした。約60名を動員。

12月25日

新蛸蔵オープニング記念・選りすぐり上映会
映画「ピュ~びる」上映会

性同一性障害の現代アーティスト“ピュ~びる”のドキュメント映画。ピュ~びるさん本人と撮影した松永監督、村岡マサヒロさんによるトークセッションも盛り上りました。トークセッションでは約30名を動員。

新蛸蔵オープニング記念演奏会 第五夜—日々の泡
坂田明+ジム・オルーク

オープニングイベントの最後を飾るのは、日本フリージャズ界の巨人、坂田明と世界的な音楽家、ジム・オルークのデュオ。四国内外から音楽好きが集まる、最終日を飾るにふさわしい、濃いライブでした。約110名を動員。

○大学生や地域との協働

当初は不要施設の除却について大学生との協働を模索していましたが、実際に工事に入ると支障をきたすおそれがあったことから、オープン後の4月29日に高知大学、高知県立大学の学生6名と共に床に防塵コート塗料を塗り込む作業を行いました。それまでの4ヶ月の間は、床モルタルから自然発生する粉塵で演者が喉を痛めたり機材に悪影響を及ぼすなどの問題があつたのですが、これがようやくクリアされたのです。

今後はたとえば大学生の劇団や楽団、クラブなどへのPR活動もすすめ、利用者としてはもちろん共に活動する仲間として協働できる場所としていくつもりです。



高知演劇ネットワーク演会による「演劇祭KOCHI」の一幕。約2ヶ月間にわたり、県内外で活躍する劇団が蛸蔵で稽古をし、本番を迎えるました。



大学生たちが大活躍してくれた床の防塵塗装。見事にコンクリートから発生する埃の発生が止まりました。

○利用しやすいハコをめざして

12月23日のオープンから5ヶ月が経過しましたが、この期間中約120日にわたり利用がありました。ただし、特にオープン後半年間はできる限りたくさんの人々に蛸蔵の存在を周知してもらいたいと考えてNPO蛸蔵構成団体の主催事業を多く設定していましたが、自分たちが実際に使うことで利用上の問題を洗い出すつもりでしたので、一般への貸出はごくわずかです。

そもそも蛸蔵には「自分たち自身の活動のためのハコ」としての意味があります。議論の中で、一年のうちNPO蛸蔵構成団体の利用日数は約180日、一般利用は60日を目標値として採用しました。ここから関連グループそれぞれの使い方（利用期間の長短、入場料の有無などがそれぞれ異なる）に合わせた利用料金や、一般客が利用しやすい貸出料金を設定し、継続的な運用を図るための利益を確保するようっています。

一般利用60日というと一見少ないようですが、実際に県内に多数の公共ホールや研修施設があるなかでこの数字を達成するのはなかなか難しいと思います。それでは、市民県民の文化センターとして、なにより多くの市民県民に使ってもらう場となるためにはどうしたらいいか。そのためには、まずは知ってもらうこと。一度はこの空間を体験してもらうこと。それが大切であると考え、利用案内リーフやイベントニュースの作成、Twitterやfacebookページなどによる積極的な広報活動を展開しています。また、申し込みがしやすいことも重要ですから、ネットからの申し込み体制を整え、担当者が申し込みから入金までの管理、当日のサポートまでをしっかりとできるような事務処理の流れを構築しています。

今後は、蛸蔵のサポート会員制度（年間パスポートの発行など）なども設けて、「いつでも何かやっている」ホールとして、蛸蔵を充実させていくようこうと考えています。

NPO蛸蔵構成団体の利用

映画

- 12月27日 「劇場版 そらのおとしもの 時計じかけの袁女神」
- 1月6~8日 「家族XJ」
- 1月26日 「人生、ここにあり」
- 2月3~4日 「デザート・フラワー」
- 2月26日 「幻影師アイゼンハイム」
- 4月27~28日 「パートナーズ」
- 5月26~27日 「エンディングノート」

演劇

- 1月15~22日 演会合同公演「橋を渡つたら泣け」
- 2月12~19日 劇団33番地公演「G」
- 3月26~31日 シャカカ「シャカカ☆ハイスクール～底抜けLOVE合戦～」
- 4月9~15日 劇団シアターホリック「Not for sale.何が言いたいんだかさっぱりな朝」
- 4月16~23日 劇団トライアングル「法王庁の避妊法」
- 4月30~5月6日 劇団文化猿人「交差点」
- 5月7~13日 劇団どつと「山の動く日」
- 5月18日 石野竜三・宵語り「神在月に舞う桜」～出陣前夜の宴
- 5月19~20日 劇団プラセボ「ホーム49症候群」
- 5月22~25日 劇団彩鬼「紅灯夜行～鎧簪～」

音楽

- 5月21日 ううじん 森ゆに 園部信教 シスター・テイル

美術系ワークショップ、イベントなど

- 1月5日 影であそぼう！ピンポンパン
- 3月10日 テハラユキノリとお野菜キャラクターを作ろう
- 3月20日 村岡マサヒロワークショップ マンガ×トマト
- 3月24日 ふるもの市
- 4月7日 職人さんと漆喰ボールを作ろう ワークショップ
- 4月8日 倉庫から美術館へ 建築家竹原義二氏講演会

一般利用 本格的な一般利用は6月から

- 2月21~23日「はまぐちひろコレコーディング」
- 楽曲の録音というのは、蛸蔵でははじめての試みでしたが、蔵の響きや演奏者の気持ちの部分も含めて、スタジオ録音とはまたひと味違う、印象的なレコーディングとなりました。
- 3月3日 F03フルカン×Film garage Film garage 第3回自主作品上映会



同じく高知演劇ネットワーク演会による合同公演の一幕。蛸蔵は高知では唯一の「街の小さな劇場」もあるのです。

今後の予定

NPO蛸蔵を構成する4団体それぞれから、意見を聞きました。

美術・パフォーマンス他

ART NPO TACO (タケムラナオヤ)

私たちが7年前に思いをこめて作った一冊の本「高知遺産」の意志をかたちにするべく立ち上げた旧蛸蔵。そこでできなかつたことが、この新しい蛸蔵ではできるようになりました。

今後は、県内の文化資産を総括する展覧会の企画を隣接する藁工ミュージアムと合同で企画したり、県外のパフォーマンスグループの招聘、デザイナーやイラストレーターといった県内の職分を持った作家の作品展の開催などを通じ、県内の美術館やギャラリーとはまたちょっと異なった視線の企画を展開していきたいと思っています。

また、そのためにも各方面の方々とのつながりを大切にしながら、土佐という田舎から文化の風をみんなと一緒に吹かせていきたいと思います。

演劇

高知演劇ネットワーク演会（岡村実記）

演会にとって、作品の制作と発表を行える場所ができたことは大変意義深いことです。日々作品を制作する場所が、同時に発表する場所でもあるのです。

使い勝手の良い収容人数と料金で、多くの団体の皆さんに場所を提供することも重要な役割ですが、運営することに囚われて、ただ消費するだけの場所になってしまっては、この場所は意味のないものになってしまうと考えています。公共施設ではなかなか成しえない、「制作と発表を行える場所」として、蛸蔵は芸術の創造発信の拠点でなくてはならないと考えています。

そのために演会は「劇場の空間と触れ合うことによる、ゆとりある生活」をこの蛸蔵を拠点に活動していきたいと思います。



毎月開いている理事会の風景、設備の整備やイベントの計画、売上の精査など、いくらでも議題は生まれてきます。それぞれの技術や知恵を活かし合いながら、課題解決に取り組んでいます。



2007年に整備した旧蛸蔵から取り外される看板。このあとすぐ、新しい蛸蔵に取り付け直しました。

映画

高知県映画上映団体ネットワーク（田邊高英）

高知県は映画館が少なく、全国で話題になっている映画でも映画館で上映されないことがよくあります。そんな映画をDVDなどではなくスクリーンで映画として観たいと、自主上映を行っています。会場として公共ホールを借りることが多いのですが、今回の蛸蔵は、多目的ホールであり映画会場として設営した場合、天井の高さが十分あるので迫力ある大きなスクリーンが設けられ、座席数が70席と、ちょうどいい大きさです。“降りそそぐような映像”を体感できます。また、日程の融通がきくのもメリットで、休日を含めた2日間や3日間などの複数日の上映会が実現できて、お客様からも「観にきやすくなった」と、とても喜ばれています。今後、これらの利点を生かして、定期的な上映会を確立し、“映画館”的な場所にしていきます。

音楽

terzotempo（佐野寛）

terzotempoは音楽を、既存のホールやライブハウスとはまた違った場所で聞くことはできないか、といった気持ちで、旧蛸蔵時代から自前の機材などを持ち寄って音楽イベントをしておりました。

というのも、音楽は空気を伝わって耳に入ってくるので、その場所、その場所によって本当に全然違ってきます。高知の歴史とともに歩んで来た古い蔵で奏でられる音は、この場所でしか得られない格別なものがあります。また、100名を収容できる、雰囲気のよいホールというのも高知には存在しないため、主催者にとっても、絶妙に使いやすい場所と言えます。

ミュージシャンにとっても、新鮮な気持ちで気持ちよく音が奏でられ、お客様にとっても、いつもとは違った場所で音楽を楽しむことができ、主催者にとっても機能的かつ金銭的にも使い勝手のよい、三方にあって、幸福である空間作りを目指しています。

全国を回るミュージシャンにも、「高知に蛸蔵あり」といった高知の名物スポットになるよう、地元のアーティストにも、新たな一步を踏み出す場にもなってほしい、と考えています。

